

## 天声人語

季節は春、そして満月の晩と  
いうから、ちょうどきのうの夜  
くらいだろうか。13歳の魔女キ  
キが知らない町へと旅立つ日が  
近づく。周りの心配をよそに、  
キキは元気に言う。「贈りもの  
のふたをあけるときみたいにわくわくし  
てるわ」▼児童文学者、角野栄子さんの  
『魔女の宅急便』である。ほうきで飛ぶ  
魔法を使い、新天地で小さな宅急便屋を  
始める物語は、各国で読まれている。角  
野さんは先週、「国際アンデルセン賞」  
の作家賞に選ばれた▼アニメ映画でご存  
じの方もおられよう。製作に関わった鈴  
木敏夫さんは作品を読んだ時、読者はむ  
しろ若い女性ではないかと感じた。「田  
舎から都会に出てきて働く女性たちのこ  
とを描いた本」だと思ったと取材で述べ  
ている▼忙しそうに歩く人を見て、理由  
もなくおびえる。町の何もかもが知らん  
ぶりした顔で動いているように見え、な  
じめない。「こんなことじやいけない。  
何かあたしにできるものを見つけなくち  
ゃ」。キキの焦りは、痛々しくもまぶし  
くもある▼就職や進学で新天地に赴く。  
必要なのは、小さな魔法の力かもしれない。  
怖がらずに話しかけられる魔法。寂  
しいときにもめげない魔法。ひとりの時  
間を大切にできる魔法……。新生活の助  
けになつてくれれば▼読んでいてキキの  
両親に目が行くのは我が年齢のせいか。  
厳しく励ます母親、「うまくいかなかつ  
たら帰つてもいいんだよ」と言う  
父親。日本のあちこちにキキとその親  
たちがいる。4月がまた巡ってきた。

2018・4・1